特別編集

講演会「希望のチカラ ～困難からの新たなスタート～」

聖学院大学では、キリスト教理念に基づき東日本大震災直後より様々な支援活動を行ってきましたが、特に岩手県釜石市の皆様と、出会い・学び・語り合う関係性を深めてきました。

復興支援のために訪れたはずの学生たちは、むしろ厳しい状況の中で復興に向けて力強く前を向いて歩んでいる釜石の人たちから勇気と力と深い学びを与えられています。こうした関係を積み重ねる中で、2014 年 1 月 29 日には大学と釜石市の連携協定を締結するに至りました。今年度は、これまでの出会いと交わりを記念し、大学学園祭において、釜石の物産販売・郷土料理販売・展示会などの「釜石フェスティバル」を実施しました。

この講演会は、この「釜石フェスティバル」の中核的なイベントとして実施されました。大震災前の釜石はどのような街だったのか、震災後の釜石の人々はどのような問題に直面したのか。人々は困難の中で地域の希望をどのように取り戻してきたのかについて、釜石の人々に寄り添い歩んでこられた東京大学社会科学研究所希望学プロジェクトのリーダーであられる玄田有史氏に講演をしていただきました。この講演会を通して、東日本大震災への意識が薄れつつある今、改めて被災地の人々について考える機会とするとともに、私たち一人一人が復興に取り組む人々とどのように向き合うべきかを考える機会となりました。

開催日時：2015年11月3日(火・祝)14：00～15：40
場　　所：聖学院大学チャペル
主　　催：聖学院大学政治経済学部／聖学院大学ボランティア活動支援センター
共　　催：釜石市

◆講師

玄田　有史氏

東京大学社会科学研究所　教授

1964 年生まれ。東京大学経済学部卒業、1992 年学習院大学専任講師、2000 年より 同大学教授。その間、ハーバード大学、オックスフォード大学などで客員研究員を務める。
2002 年東京大学社会科学研究所助教授、2007 年より同大研究所教授（現任）。専門は労働経済学。著書に『仕事のなかの曖昧な不安』（中央公論新社／サントリー学芸賞、日経・経済図書文化賞を受賞）、『希望のつくり方』（岩波書店）など著書多数。

◆パネリスト

岩崎　昭子氏

浜辺の料理宿「宝来館」女将

岩手県釜石市の根浜海岸で、先代がはじめた「宝来館」を 20 代半ばで継ぎ、現在に至る。東日本大震災では旅館も壊滅的な被害を受けたが、日本・世界各地からの応援もあり、2012 年 1 月に再オープン、2015 年 4 月にはリニューアルオープンした。本学では、釜石市で復興支援活動を開始した 2011 年の秋からプログラムの実施や現地学習等でお世話になっている。

伊藤　聡氏

一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校代表理事

震災前は宝来館に所属し、グリーン・ツーリズムの実践や地域内外、都市部との連携を強化するため活動に取り組む。震災後は NPO 法人ねおすに所属し、復興支援活動を続け 2012 年 4 月に独立、「三陸ひとつなぎ自然学校」を立ち上げ、全国各地からのボランティアやインターンを受け入れながら復興につなげる事業を行っている。本学では復興支援ボランティアスタディツアーを実施する際に現地コーディネーターとしてお世話になっている。

渡邉　エリカ

聖学院大学こども心理学科 3 年

1 年生の 4 月に参加した本学主催の復興支援ボランティアスタディツアー「桜プロジェクト2」に参加したことがきっかけとなり、聖学院大学復興支援ボランティアチーム【SAVE】に所属し、現在代表を務めている。また、今回の釜石フェスティバル発起人の一人でもある。

◆パネルディスカッション司会

川田　虎男

聖学院大学「ボランティア論 A・B・概論」講師、ボランティア活動支援センターアドバイザー

講演会

はじめに

ご紹介いただきました玄田です。

初めて聖学院にお邪魔しました。とてもきれいなチャペルで驚きました。

今日は、希望の話をちょっとだけさせていただきます。

実は、このようなチャペルではなく、東京の築地、魚河岸の横に築地本願寺というお寺の方から「希望の話をしてくれないか」と言われまして、何年か前にお話に行ったことがあります。その時はだいぶ緊張して、2 時間ぐらい話しました。今日はどうかわかりませんけれど、大体講演が終わった時には、拍手があるじゃないですか。その築地本願寺の時には、お坊さんから全く拍手がなかったんです。「えっ？」と思って、何事かと思った瞬間に、お坊さんから拝まれたんです。驚きました。控え室に戻り、その本願寺の主催の方に「今まで話して拝まれたのは初めてだったので、驚きました 」と話をしたら、優しく「今日皆さん、とても新鮮な気持ちで希望の話をお聞きになったと思いますよ」とおしゃってくださったんです。気になったので「新鮮な気持ちとは、どういう意味ですか？」と聞いたら、このように説明下さいました。

築地本願寺は、仏教のうちの浄土真宗という宗派で、いくつかのお経があります。しかしそのどのお経を見ても、「希望」という言葉は一回も出てこないんだそうです。ご存じでしたか？私、初めて知りまして、そういえば確かにお経で「希望」という言葉は、聞いたことがないなと思いました。それからまた別の機会に、埼玉の新座にある平林寺さんという禅宗のお寺にも行きました。素敵なお寺ですよね。そこに行って「この間、築地本願寺に行ったら、浄土真宗には希望という言葉がないと言われました。平林寺はどうなんですか？」と聞きましたら、「禅宗にも、もちろん希望という言葉はないですよ」と言われました。禅宗では「無の境地」が大事なんだそうです。「無の境地だから、希望とか夢とか欲とかはなくても大丈夫ですよ」と言われました。浄土真宗も「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と唱えていれば、仮に希望が見つからなくても、ちゃんと極楽に行ける」という教えだそうです。

今日はキリスト教大学。聖書に詳しい方がたくさんいらっしゃるのではないかと思うのですが、私は、全然知らないので、もし希望について変なことを言ったら、ちょっと首を振ってください。「違うな」と。私が聞いたところ、聖書にはとても大切なことがたくさん書いてあるんですけれども、特に大事なものが 3 つあって、「愛と信仰と希望がとても大事なんだ」と書かれていると聞きました。仏教の世界ではあまり希望という言葉は使わない。一方で聖書では希望という言葉はとても大事。だから、少し違うのですが、私がいろいろ希望について考えるなかで思ったのは、根っこの部分は意外と似ているかな。なかなか希望が持てなくて、苦しい人が世の中にたくさんいる時に、「いや、どんなに苦しくても希望というものはちゃんとあるんですよ」と考える立場と、「いや、希望が持てなかったとしても、生きていけるんですよ」という。だから、生きる悲しみとか生きるつらさということのなかで、人は希望と出会ったり、希望と向き合ったりするんだなということを

教わったことがあります。

「希望」と深く結びつく言葉

以前、この希望という言葉で印象的なことがありました。皆さん、携帯、スマホとかパソコンとかお使いになると、検索機能がありますね。とても便利なものです。以前、いろいろな検索機能を開発している日本人の技師の方にお目にかかったことがありました。その方は、毎日新聞という、日本で一番古い、明治からある全国新聞を、創刊号から今日の分まで全部コンピュータのなかに入れて、その膨大な情報のなかから、言葉と言葉の見えない関係というのを見つけるということを一生懸命研究されている方でした。お目にかかった時に、「今、希望ということを知りたいと思っているんです」とお話をしました。「ただ、希望というものはなかなか自分にもよくわからなくて、あなたが研究されていることだと、希望という言葉と深く結びついている言葉を調べていただくことはできますか？」とお願いしてみました。「では、今から画面に希望という言葉と深くつながっている言葉が出てきますから、少しお待ちください 」と言われたので待っていました。数秒後に、希望に関係している言葉というのが、いくつか出てきました。みんな日本語でした。ですが、いくつか出てくるなかで、最初に出てきた言葉が、とても印象的だったので、今でもよく覚えています。さあ皆さん、希望という言葉とすごく関わりの深い言葉、どんな言葉を連想されますか。本当でしたら、お一人お一人に伺ってみたいのですが、残念ながら時間がありません。希望という言葉と深くつながっている言葉、そこで出てきたのは「水俣」という言葉でした。

ちょうど震災のあった 2011 年、九州新幹線が開通しました。新水俣駅というのを降りますと、もうすぐそこは水俣です。私も震災が起こった年の初夏の頃に初めてこの熊本県水俣市をお邪魔しました。その時には飛行機で鹿児島空港から行ったのですが、きれいな街です。ちょうど不知火湾という辺りを車で通って入っていくのですけれども、夕陽のキラキラ輝くきれいな海辺があります。三陸の海ももちろんきれいですけれども、南国の海も本当にきれいです。そして、夜は地元の方と食事して、お魚ももちろん美味しいですし、山菜もおいしい。南国の方の気質も穏やかでとても楽しい、お酒もいい。翌日もチャンポンをいただいたのですが、美味しくて、素晴らしく楽しい思いをしました。こんなに自然に恵まれた所があるんだと思いました。

実は水俣、もう一つ有名なものがあります。こちらでも当たり前であるゴミの分別回収。あれを最初にやり始めたのは水俣です。だからゴミなんかこれっぽっちも落ちていない。本当に環境意識のものすごく進んだ地域です。

ただ、この希望という言葉と深くつながっている水俣というのは、そういう風光明媚な水俣でもなければ、環境に先進的な地域の水俣でもなく、残念ながら水俣病という大変な深刻な事柄が起きてしまった町、水俣。だから時にはいろいろなつらい思いをされて、たくさんの命が失われたり、今でも健康に不安を抱えていらっしゃる方がたくさんいらっしゃったり。また、いろいろな偏見、差別、風評被害、そういうものをたくさんたくさんずっと経験してきた町

です。その時、たまたま前の水俣市長にお目にかかったのですけれども、その震災直後、お目にかかった時にいの一番に言われたのは、「ああ、福島のことが心配だ」とすごく言われました。自分たちが受けてきたいろいろな偏見とか風評被害とか、同じことを経験されないように、歴史から学んで欲しいと。「自分たちがもっと若ければ、本当に福島に行っていろいろな方を応援したり手助けしたりしたいのだけれど」みたいなことをずいぶん言われたことが、とても印象に残っています。

では、どうしてそのような苦しい、いろいろな経験をした町の水俣が希望と繋がっているのだろう？実際の水俣、いろいろな施設などをお邪魔しますと、必ずしも健康面で十分でない方が絵を書かれた額縁などがあったりするなかに、意外と「希望」という字を見かけたりします。その時思ったのは、「希望」という言葉とよく似ている言葉で「夢」という言葉があります。よく「夢と希望」とか、「若い人たちに夢と希望がもてるような社会を」などと言ったりします。夢も希望も将来があっていいなという感じがしますが、ちょっと違うかなと最近思うようになりました。夢は皆さんご覧になるように、大体が無意識です。無意識に見たりします。あと、埼玉ともご縁がある本田技研という会社の創業者である本田宗一郎さんという方は、いつも「夢を持ちましょう」と。やりたいこと、作ってみたい自動車、バイク、たくさんいろいろなアイデアが湧き上がってきたのでしょう。そういう方はよく「夢」という言葉を使われる。無意識にどんどん湧き上がってくる。希望はどちらかというと、意識して持つもの。つまりさきほどの水俣のように、苦しいことがあったり、なかなかうまくいかないことがあったりしても「それでも明日はいい日になるんじゃないか」「いい明日にしたい」「今のこの苦しい思いを少しでもラクにしてあげたい」「ラクになりたい」という気持ちから、希望を持つんだとなる。夢が比較的無意識のうちに持つものに対して、希望というのは、どちらかというとあえて持つ。どんどん湧き上がってくるようなものというよりも、意識して持つのが希望。だからどちらかというと「希望」という言葉とすごくつながっている言葉は、「試練」とか時には「挫折」という言葉です。少し厳しい言葉かもしれませんが、「修羅場」とか、こういう苦しい経験をされた方が、今は辛いけれども希望を持っている。だから意外と試練とか挫折とか希望というのは、言葉同士に関係性があるんだなということを2005 年頃から少しずつ感じるようになりました。

釜石との出会い

ただ、挫折や試練て誰もが願って経験したくはない。こういうことを経験して、ずっと今でも苦しい思いを抱えていらっしゃる方もきっといて、トラウマというか、そういう苦しいことがずっと続いている人もたぶん世の中にはたくさんいらっしゃる。

だけど一方で、こういう挫折や試練を経験しても、そこからもう一回立ち上がっていく。そこから何か新しいものに向かっていくという人もいる。では、どういう人がこういう苦しい経験をしたうえで、次に向かっていくことができるのだろう、ということが知りたくなったのです。いろいろな本を調べてみても、なかなか書いていない。なかなか本では見つからないなと思った時に、「これはそういう試練とか挫折とか苦しいことを経験された方に、直にお話を伺うのがいいのではないか」と思って、どこかそういう地域が日本のなかにあるかなといろいろ探し始めました。もちろんひとつの候補はさきほどの水俣という所でした。「他の地域で、試練とか挫折から、もう一回希望をとつなげた町の人たちにお話を聞いてみたい」と言ったところ、たまたまある人に「釜石はどうか」と言われたのです。

その方はその時、少し前に釜石にお仕事で出張をされていた方でした。私たちはその時まだ釜石という所に行ったことがありませんでした。ただイメージとしては、もちろん鉄の町。今話題のラグビーがたいへん強かった町。そういうイメージはずいぶん持っていました。だけど、言われてみれば、名前は聞いたけれども、最近ちょっとどうなのかなということを失礼ながら思っていたわけです。だけど、その方が、「苦しいことを経験して、そこから立ち上がる町のひとつは釜石なんじゃないの」と。ご存じの通り、近代製鉄の発祥の地ということで、新幹線に乗ってきますと、JR の冊子のなかに釜石の鉄の歴史、世界遺産になったそういう写真がたくさん貼ってあります。今、観光客もたくさんいらっしゃる。ただ、あの近代製鉄が始まった直後に、当時、釜石村にもたいへん大きな津波が町を襲いました。当時の釜石村のお二人にお一人の方がお亡くなりになるという、大変な厳しいことを経験しています。そういう困難にもめげず、鉄の町として日本の発展を支えた町でした。また、昭和に入りますと、たいへん大きな津波がまた来まして、釜石にある唐丹という地域の農民、漁民の方がたくさん亡くなっていたりします。その後、太平洋戦争が始まります。戦争が終結する数週間前に艦砲射撃という、海から一斉に射撃を受けます。鉄の町ですので、日本が二度と軍備を持たないようにするためには、武器、鉄、それを壊すというので、釜石とか北九州市は明確に標的になるわけです。文字通り町が壊滅する。そのなかで、もう一回立ち上がって、いち早く高度経済成長を支える鉄鋼業を中心に町は発展したのです。その後、まだ日本全体が高度成長の恩恵を享受する時代にいち早く鉄鋼不況が始まりまして、いろいろな苦しい経験をする。その都度立ち上がって、立ち上がってやってきた町で、確かに調べてみると、これほどまでいろいろな試練や修羅場を経験して、そうそう立ち上がってくる町はないなと思いました。

釜石で一番挫折を経験している人

私たちは 2006 年 1 月 13 日に初めて釜石線に乗って釜石という駅に降り立ちます。当時は珍しく、釜石はそんなに雪の降る地域ではありませんが、雪が降っていたことを思い出します。釜石鉱山のほうにちょっと寄ってみましたら、その時にシカがいたのを今でも覚えています。そこから釜石と

私たちの出会いが始まりました。私たちはどうすれば苦しい経験、そこから希望につなげていくことができるのか、お話を聞きたいというので、いろいろな方にお話を聞くようにしました。最初はたいへんでした。まずお話をじっくり聞こう。特に苦しい経験をされた方は、やはり年配の方が多い。艦砲射撃を経験したとか、場合によっては昭和の大津波の時を知っているとか。そういう方にお話を伺いに行くわけです。行って、お話をする。まあ何をおっしゃっているのかまったくわかりませんでした。釜石弁というのは手強い。お互い、こっちもわからない、向こうも伝わってないということが分かり合うわけです。不思議な空間でした。けれども、それを何回かやっていくと、やはり自然とわかるようになってくる。

それで、何回も行って、だんだんお互い打ち解けてきて、お話をするようになった時に、ある方から、その年配の方の息子さん、市役所で働いていた方ですけれども、ある時、私たちにこんなことを言われました。我々は、東大さんって呼ばれていたのですけれども、「最近、オヤジが、東大さんが来るのを楽しみにしていた」と。「『今度、いつ東大さん来るんだ？』と言っている」と。とても驚きました。しかし、最初は、我々も聞き取れませんでしたけれども、自分の生きてきた道筋、自分の生きてきた物語を一生懸命聞こうとする。一回でわからなければ、二度、三度と聞こうとする。そうするなかで、「ああ、自分の人生、困難もあったけれど、でもやっぱり前を向いてきて、生きててよかった」。そういうのを思いだして元気になってくると言われて、「ああそうか、一生懸命耳を澄まして人の話を聞くというのは、これだけお互いに希望を持ち合えることができるんだ」。ということを釜石で教えてもらったわけです。

私は本当に当時、今もそうですけれども、ずいぶん失礼なことを釜石の方に聞きました。特に、「いや、釜石に来た理由は希望について知りたいと思って来たのですが、そのために釜石で一番挫折を経験している人に話を聞いてみたいんです」なんてことを、いろいろな方に、失礼ながら聞いたわけです。今考えれば赤面するようなことを聞いているわけですが、一番挫折を経験している方と言った時に、かなり多くの釜石の方が、八幡登志男さんというお名前を出しました。後からご登場される宝来館の女将、岩崎昭子さんのご親戚でいらっしゃる八幡さんにお目にかかりに行きました。八幡さんは昭和 5 年生まれで、すごく魅力的な方です。今、世界遺産になった橋野という所で生まれた方で、ずっと育ち、そこで死んでいくとおっしゃった方です。

3人わかってくれれば大丈夫

釜石が苦しいことを何度も何度も経験するたびに、八幡さんは立ち上がります。昭和の不況で合理化になって、鉄が厳しくなる。「転校生が集団で、バスで町を後にした光景が今でも忘れられない」っておっしゃったりする方がいます。バスで同級生を送り、残った人々の思いってどんなだったでしょう。たぶん寂しくて寂しくて、いろいろなことを思ったはずです。その時に八幡さんは、元々は林業の方です。林業でコツコツためたお金をはたいて、自ら遊園地をつくったりします。もちろんディズニーランドのように大きなものはできません。い

ろいろなものを中古で買って、あと大きな釣り堀を作って、子どもたちにそこで元気を取り戻してほしい。子どもたちは、とても喜んだそうです。だけどある日、大きな洪水があって、その遊園地がまったくダメになってしまった。最近では、「仙人秘水」という水がたいへん有名で多くの方に喜んでいただいているようですが、やはり釜石は鉱山があるので水がいいものですから、「山華の雫」という橋野で採れる水を売っているそうです。めげない、チャレンジする。そういうことをする方です。

八幡さんに「なんでそこまで頑張るんですか」と聞いたことがあります。私は釜石弁を、今でもうまくしゃべれませんが、八幡さんはこうおっしゃいました。「生まれた場所は選べねえから」って。それだけです。八幡さんはぼくとつとしている。だからこっちも失礼ながら、「八幡さんのやっていることって、成功ばかりではなくて、むしろ挫折の連続ですよね？」と言ったら、「いいんだ。それでいいんだ。誰かが一生懸命やったということを誰かが知ってくれればいいんだ」とおっしゃいました。素敵だなと思いました。「八幡さんはいろいろな苦しいことを経験した時に、どうやって挫折を乗り越えてきたんですか 」と聞いたことがあります。八幡さん、こうおっしゃいました。「苦しいことを乗り越える時、3 人わかってくれる人がいれば大丈夫だから」とおっしゃいました。

釜石、昔は 9 万 2,000 人。とても大きな町です。今はずいぶん人口が減りまして、3 万人台前半ぐらいになって、かつての繁栄からするとずいぶん小さいです。ただ、やはり 3 万人の町ってそうはいってもとても大きいです。このなかで、八幡さんを始め、いろいろな方が、町を元気にしたい。みんなともう一回明るく笑っていきたい。そういう思いで活動されています。私の大好きな呑ん兵衛横丁に『お惠』という店があって、そのお惠さんは、本当に大きな声で笑われる人です。私は最初、あんな大きな声で笑うというのは、お耳でもお悪いのかなと思って、「なんでお惠さん、そんな大きな声で笑うんですか？」と聞きました。お惠さん、こう言いました。「同じ笑うなら、大きな声のほうが楽しいじゃない」って。何となくそういうところが釜石にはあります。

八幡さんは「3 人わかってくれれば大丈夫だから」と言いました。お惠さんにせよ、八幡登志男さんにせよ、後から出てくる岩崎昭子さんにせよ、一生懸命です。今も昔もずっと一生懸命やっている。ただ、正直に言えば、みんながみんな、全員がいつも応援してくれるわけではない。釜石、いい所ですけれど、そういうところやはりみんながみんな関心を持ってくれているわけではない。無関心の人だっているでしょう。もっと言えば、自分の生活が忙しくて、ほかには構っていられないという人もたくさんいるでしょう。また、いろいろな意見の食い違いもあります。考え方が違う、習慣が違う、価値観が違うとぶつかることもある。だから八幡さんもあれだけ一生懸命やっても常に皆に認められたわけではなかった。橋野の鉱山をもう一回皆に知ってもらいたいと言っても、「どうせ無理だよ」。そんなこと、たくさんあったはずです。そんな時、八幡さんは、常に 3 人、どんなことがあっても自分を絶対に応援してくれる人。また、もし自分が間違いかけたら、本気で

意見してくれる方が 3 人いたんだそうです。だから今、特に若い人なんていろいろな人間関係が苦しいという、人付き合いがたいへんだという、若い人だけではない。会社で働いている人だって、いろいろな人間関係苦しい、みんなと仲良くしなければいけない。そういうプレッシャーのなかで押しつぶされそうになっている人だってたくさんいるかもしれません。「3 人わかってくれる人がいれば大丈夫だから」。私自身、それを聞いた時にずいぶん気持ちが楽になった記憶があります。

夢を持ったまま死んでいくのが夢

八幡さんはこんなこともおっしゃったことがあります。鵜住居という町にある、釜石東中学校。今回の震災でいろいろな取材を受けた中学校です。たいへん大きな津波で町、学校全体は海のなかに沈んでしまったのですが、幸いなことに学校にいた生徒さんはお一人も命を失うことがなかった。釜石の方は、あまりお好きな表現ではないですけれども、「釜石の奇跡」と言われる学校です。その釜石東中学校に震災前に、私と八幡さんがお招きいただきまして、その東中学校の生徒さんにお話をしたことがありました。その時、東中学校は「夢というものを考えよう」というのを学校のテーマにして、いろいろな夢について考えるという授業をしていました。そのなかでいろいろ探したところ、実は釜石という町のなかで、いつも夢を追いかけて、苦しいことがあっても夢を諦めないでやってきた人で、八幡さんという人がいるんだということを中学生は初めて知るわけです。今、全国どこでもそうですが、地方の中学生は都会のことをよく知っています。今、渋谷でどんなものが流行っているか、都会で何が今人気があるのか。洋服や音楽や食べ物、本当によく知っている。ただ、意外と灯台下暗しと言いますが、地元で一生懸命やっている人のことは、なかなか知るチャンスがありません。その時、東中学校の生徒たちは「夢」というテーマで考えるなかで、初めて地元で常に試練があっても頑張り続けている八幡登志男という人を知り、初めて直に、生で話を聞くわけです。さっき、お話をしたような、八幡さんの苦しい経験、乗り越えてきた経験を八幡さんは生徒一人一人に対して一言一言語りかけます。生徒たちは真剣な顔をして八幡さんの話を聞いていました。最後のところで質問コーナーというのがありました。生徒が手を上げて、八幡さんにいろいろな質問をする。最後の質問に八幡さんにある中学生が質問をします。もう当時 80 歳にもなったか、なりかけたこの八幡さんに、「今日は感動した」とその生徒は直接言葉を伝えます。その上で八幡さんに生徒はこう聞きました。「八幡さんは今も何か夢を持っているのですか？」と。ある生徒は聞きました。八幡さんはちょっと照れくさそうに、ほんのちょっと照れくさそうな表情を浮かべながら、八幡さんはその中学生にはっきりとこう言います。「夢、あるよ」と。「自分の夢は、夢を持ったまま死んでいくのが夢」と言いました。シーンとして、生徒はその言葉を自分のなかに一生懸命吸収しようとしていることが、私には横から見ても感じ取れた気がします。

今、夢にしろ、希望にしろ、どちらかというと、「かなわない夢なんて持っても意味がない」とか、「実現しない希望なんて無駄

だ」とか、何となくそんなふうに考えがちなところが正直ある。だから、「かなわない夢なんか持ったってしょうがないよ。もっと現実を見ようよ」とか、そういうことをついつい言ったりもします。だけど八幡さんはそうではない。もちろん夢を叶えること、希望を実現することも大事だけれど、夢を追いかけ続けること、夢を探し続けること、場合によっては夢を育てていくこと、夢を希望を成長させていくこと、その追いかけ続けるということが尊いことなんだということをたぶん中学生に言いたかったのです。

希望を自分たちで作っていく

釜石ではそういう思い出がたくさんあります。希望のことを聞きに行って、最初にいろいろな方にお話を聞きました。それは平成に入って、釜石に高炉がひとつもなくなって、たいへん厳しい不況を経験し、そのなかで数億円という借金を背負って、もう倒産寸前までの経験をした、そういう会社の副社長さんに私たちの仲間がお話を聞いたことがありました。「希望って何ですか」と聞きました。「そんなことはわかんねえ」と言われました。「希望の研究をしているんですが」と言ったら、「東大さんは暇でいいな」と言われました。「そんなんで研究なのか」と。「大丈夫か」と言われました。だけどやっぱり希望って知りたい。何度も何度も伺って、何度も何度も行く。いろいろ聞いても「希望、そんな難しいのわがんねえ」といつも言われました。ただ、ある時に、こういうふうに言われたのです。「また希望のことを聞きに来た？わがんねえ。ただ自分に言えることはひとつだけある。自分の経験だが、言えることは、希望に棚からぼた餅はねえな」と言われました。大変な苦しい思いをして、たくさんの借金をし、そのなんとか返すメドがやっと立ちかけた。その方は、「希望に棚からぼた餅はねえな」と言われた。そして「希望は、動いて、もがいて、ぶち当たるのが希望だ。誰かから与えられた希望なんてのは、本当の希望ではねえんじゃねえか」と。ガーンと思いました。

よく、夢とか希望とかという言葉を使う時に、「希望を与えてほしい」とか、「希望を与えられない」とか、そういう表現を何気なく使う時があります。また、「誰かに希望を与えるんだ」とか、そういう威勢のいい言葉を例えば政治のなかでたまに見聞きしたりすることもあります。「ああ、違うんだ」と思いました。希望は与える、与えられる、そういうこともあるけれど、大事なことは「動いて、もがいて、ぶち当たるのが希望だ」と。希望を自分たちで追いかけ続けて、自分たちで作っていくのが希望なんだって。だからそれから私たちは希望の研究をしていった仲間たちは、自分たちで約束をしました。私たちは希望を与えるとか与えられるという言葉を使うのをやめよう。だけど、一人一人誰もが希望を自分たちで作っていく。自分たちが希望を育てていく。そういうチカラと権利とそして気持

ちを持っている。それを何とかみんなで応援できるような、そういう社会とか、そういうものを作るために何か考えることができないか。もしかしたら何かお手伝いすることがあるのではないか。そういうことを考えるようになったわけです。

東日本大震災

そういう思いを抱えるなかで、2011 年 3 月 11 日がやってきます。連絡も取れずに、もう呆然とするなかでありました。ただ、約 1 カ月弱、4 月のはじめになって本当に偶然ですけれど、当時羽田空港から花巻空港へ臨時便が飛びまして、もう本当に数分で満席になるような状態だったのですが、たまたま私と仲間の大堀くん 2 人分のチケットを取ることができました。嬉しかったですね。やっと久しぶりに会える。その時に思いました。何か持っていきたい。何か応援したい。ただ、いろいろなニュースとか新聞を見聞きして、食料はある程度間に合っているようだと。だんだん温かくなってきて、衣服などもそれなりに全国からの思いがあって足りているようだ。何を持っていこうか。もちろんお金なんて失礼なことはできないと思った時に、ある知り合いから「これを持っていったらどう？」と、大量に何かを渡されました。私自身はちょっと半信半疑でしたが、それを抱えて釜石に行きます。久しぶりに会って、全然言葉になりませんでした。間違ってもあの状況で、「希望を持ちましょう」なんてことを軽々しく言ってはいけないと思いました。知り合いに会ったら、ただ黙って握手をするだけでした。

駅からすぐ近くにある、高台に釜石小学校という学校があります。そこはたくさんの方が避難されている場所になりました。その釜石小学校でいろいろな避難の方たちのお世話をされている市役所の仲間がいました。そこで久しぶりに再会します。もう本当に忙しそうにされていましたから、あまりお時間も取らせられないというので、早々に引き揚げます。ただその時に持ってきたものを、「もし、これ、何か必要だと思う方がいらっしゃったら、使ってください」と置いて帰りました。そしてそれから何日かたったあと、さっき言った大堀くんを通じて、「いやあ、この間持っていった物、ものすごく喜ばれて、もっと欲しいと言われた」と言われて、こちらも「えっ？」と思いました。何を持っていったと思います？それは、カレンダーだったんです。

希望をつくるカレンダー

ちょうどもう 3 月も終わりでしたから、売れ残りがけっこう安い値段で手に入りました。同時に思ったのは、4 月から始まるカレンダーもありましたけれども、これではないと思いました。ちゃんと 3 月 11 日という日が載っている、2011 年 3 月 11 日という日があるカレンダーが必要なんだろう。何となく直観的に思って、安く買い込んで行きました。喜ばれました。なぜ喜ばれたか。細かいことは正直わかりません。ただ伝え聞いたところによると、カレンダーはちょうど卓上のなかに一日一日、今日やるべきこと、明日やるべきこと、来週やりたいこと。できなかった場合にはこの日、もう一回やるということを一人一人が自分の手でひとつひとつ書き込んでいって、自分たちの希望を自分の言葉にして、その行動

の支えにされたようです。その話を聞いたとき、嬉しかった。「ああ、希望をつくるっていうのは、そういうことなんだ」と思いました。大きなことをやるということもあるかもしれないけれども、一人一人が自分の希望を自分の言葉にして、カレンダーに書き込んで一生懸命やる。できなければもう一回明日に書き込む、明後日に書き込む。釜石ではそういうことをたくさん教えていただきました。

「津波てんでんこ」と信頼

ただ私たちは、もちろん大学の仕事もありますので、気にはなりましたけれども、頻繁に行くことはできませんでした。このあといろいろお話がある聖学院の皆さんが、いろいろな形で我々以上に釜石に行って、一緒にいろいろなことを経験し、時には悩み、いろいろなことをされたということを聞いて、釜石を好きな人間の一人として嬉しくなりました。ぜひ今日それを私もいろいろ聞けるのではないかと思って楽しみにもしています。

震災後、いろいろなことを思いましたが、特に感じるようになった言葉があります。それは何かというと、希望もそうですが、この言葉の意味をあらためて思い返さずにはいられませんでした。よく震災後報道されたので、既にご存じの方が多いかもしれませんが、三陸で津波ということで古くから言い伝えられている言葉があります。「津波てんでんこ」という言葉があります。この「てんでん」というのは、「手に手に」とか、「めいめいで」という意味です。だから、津波が来た時には、まず一人ひとりが自分の命を最優先にして、めいめいそれぞれが、おのおのが自分の命を守ることを最初にやらないといけないよという、過去の試練を踏まえた経験、ある種の希望の言葉です。だけど、この「てんでんこ」ということの意味を私は震災後に初めて知ることになります。

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に震災がきて、大変なことになった。まだ働いている職場で仕事をされていたお父さんお母さんは、最初に気になるのは、学校にいるはずの子どものことです。そして、自分の実家でだいぶ年配で足が悪くて、なかなか自分では逃げることが難しい親御さんのことが最初に気になります。ご夫婦同士で連絡を取り合って、「じゃあ、おまえは学校に行って、子どもを迎えに行ってくれ。俺はまず実家に行って、親父とお袋を」と。みんながみんなたぶんそういう行動をしたのでしょう。三陸はたくさん道があるわけではありません。細くて一本の道もたくさんあります。みんなが子どものことを、親のことを思って車を走らせます。残念ながら大渋滞が起こるわけです。それは釜石に限りません。あの時には被災を受けたほとんどの地域で同じような光景が起こっていたのでしょう。そのなかで時間がたった後、想像もしていなかったような大きな波が町を襲っていくことになるわけです。みんなが必死に流されまいとして、ブレーキを踏みながら抵抗しながらも、波は残酷です。

そのなかで、「てんでんこ」というのは何を意味しているのか。これは理想に過ぎないと言われるかもしれません。けれども、釜石ともご縁のある群馬大学の片田敏孝さん、防災教育を一生懸命全国に広めようとされている方は、こうおっしゃいます。「大

事なことは、信頼だ」と。日頃からの信頼づくり。一番よかったのは、こうなった時に、子どものことは心配だけれども学校を信頼しよう。先生を信頼しよう。だからそのために日頃から自分たちも先生とよく話をしよう。こういう時にはそれぞれ命を守らなければいけない。こういう時はどうするか。先生方がどうされているかを納得して、信頼して、まずは自分の身を守ろう。子どもも子どもで、「お父ちゃん、来ないで」「おかあちゃん、来ないで」。もしそれで学校の前で渋滞になって、親がみんな流されたら子どもたち悲しむでしょう。自分たちはちゃんとこういう時に逃げる。そういうことを一生懸命日頃からやっているから信頼してと。地元も地元で、こういう平日にこういうことが来ることになったら、任せろと。町のなかの若い年寄りが若くない年寄りを助ける。ちゃんと日頃から練習もしているし、そういう信頼関係を作っているから、こういう時は誰が誰を助けるってやっているからおまえ、帰ってくるな。そのかわりもし土日にこういう津波がきて、おまえ、家にいる時は、おまえ、死に物狂いで年寄りを助けて走れよ。そういう日頃からの信頼作りをどれだけしているのか。

めいめいで自分の命を最優先する。理屈はわかります。でも、できないですよ。やっぱりああいう状態になったら、親のこと心配ですもん。子どものこと心配ですもん。大事な人のことは心配ですもん。人間ってできないんです、そんなこと簡単には。それでもやっぱりお互いの命を大事にしようという悲痛な思いがこの「てんでんこ」という言葉のなかには込められている。そのことを、私は初めて知るわけです。自分の命を守ればいいなんて簡単なことではないのです。そんなとてもとても難しいことを考えるためには、どれだけ日頃からお互いが話をし、お互いが信頼関係を作っているのかということなのです。

釜石でたいへんつらい思いをされた私たちの知り合いは、反省を込めて今、全国のいろいろな所に行って、その時の経験を反省も込めて、いろいろと率直に話していらっしゃいます。釜石市役所で防災を担当された方は、いつも自分を責めながらも、「日頃からの信頼をつくっていくということがなければ、人の命は救えない」ということを、繰り返し繰り返し全国でお話をされています。

希望をつくる「絆」

希望をつくる。その時にもうひとつだけ大事なものがあるということを知りました。それは何か。それは、震災前から我々が希望の話を釜石の方々とするような時のひとつの合い言葉です。震災後、盛んに使われるようになった言葉で、「絆」という言葉があります。やはり絆がとても大切だ。信頼という言葉ともたいへんつながっている言葉です。ただ、この絆という言葉には、実は社会学という学問のなかには、少なくとも 2 種類の絆があると言われているそうです。

ひとつは何かというと、強い絆。絆のことを英語でタイ、ネクタイのタイ、結びってタイと言います。Strong ties と英語で言います。これはどんなものかというと、家族とか恋人同士とか、小さい時からいつも一緒にいる親友とか、日頃生活を共にし、苦楽を共にし、そういう間柄のことを強い

絆。だからあまり細かいことを説明しなくても、もう目線と目線でお互いの気持ちがわかる。あうんの呼吸でわかる。皆さんにもそういう強い絆で繋がれた人間関係がきっとおありだと思います。強い絆は素晴らしいです。何が素晴らしいかというと、いろいろな安心を与えてくれます。理屈を超えて自分のことをわかってくれる、損得を超えて自分のことを認めてくれる、そういう関係がある人は、本当に安心感とか幸福感を得ることができる。反対に言えば、今、親子であっても、家族であっても、なかなかこういう強い絆のような安心感が持てないような子どもたちが日本で増えているとも言います。こういう状況を何とか変えていかないといけない。

もうひとつ絆には弱い絆。もしくは緩やかな絆と言われるものがあります。ちょっと変な言葉です。絆って強いものなんじゃないの？　けれどもこれは英語で弱い、Weak ties と言います。これは何かというと、まさに聖学院大学と釜石の方々の関係のようなもの。生徒さんも学生さんも授業があります。先生方も日頃のお仕事があります。365 日の毎日を通うわけではない。先ほど、平先生が震災後 20 回ぐらい釜石に行かれたとおっしゃってすごいなと思います。私なんかよりも全然多いです。それでもやはりいつもいつも会うわけではない。むしろ、場合によっては何カ月に 1 回とか、下手すると私なんかも何年に 1 回なんて方々もいるわけです。だから、いつもいつも会うような間柄ではない。だから、やっている仕事も違う。例えば、女将さんは旅館を営んでいらっしゃる。私は大学で学んだり教えたりしている。全然仕事も違う。住んでいる場所も違う。経験してきていることも違う。失敗してきたことも、少ないけれども成功してきたことも違う。違うので、たまに話が合わないこともあります。いったい何を言っているのだろう。だけど、それがいつも会っていると「ああ、そういうことってあるんだ！」という、クエスチョンマークがビックリマークに変わることがある。自分と違う世界で生きている人たち。けれども、信頼でつながっている人からは、最初は「え？どうなのかな？」と思うことが、途中から「うわあ、そういうことをやるんだ！」という気づきを与えてくれることがある。気づきを与えてくれる。そこから「これやってみよう」とか、「これ、できるんじゃないか」という希望が生まれることがある。

緩やかな絆と希望

実は、この緩やかな絆というものは希望ととてもつながっていることがある。これは釜石でもとても感じました。釜石はかつて東北の上海と言われるぐらい華やかだったのですが、製鉄関係を含めて同時にいろいろな人の出入りが大きな町です。ですので、比較的外部の方に関しては、非常に開放的なところがあります。逆に去る者は追わずといったようなあっさりさもあります。だけれども、いろいろな人が出たり入った

りするなかで、お互いに切磋琢磨したり、学び合ったり信頼するなかで、苦しい状況を乗り越えてきた町でもある。だから、こういう苦しい経験をしても、かつていろいろな形で釜石にご縁のあった人が、この緩やかな絆を通じて、「こういうことがあるよ」とか、「こういうものができるんだよ」とか、「何かあったら言ってね」と。

釜石ではまだまだ復興が難しいところもありますし、比較的順調に復興しているところもある。おのやさんという、非常にお魚の美味しいお店などは比較的早く復興しました。最初、お目にかかった時に、「Weak ties 実感したよ」と社長の小野さんに言われました。小野さんも日頃、とても忙しくされるなか、地元の仲間、同業者の仲間も大事にしながら、忙しいなかで違う地域の方、違う業種の方、我々も含めていろいろな方と、緩く、無理せず、いろいろな関係を広げるなかで、小野さんも努力家で頑張り屋さんですから、いろいろな気づきやヒントを得て、そのなかで震災後いろいろな助けを借りながら、一歩二歩進み出しているわけです。

釜石の方々とのお約束

たぶん、これからもこの聖学院大学と釜石の Weak ties は、ずっとずっと続いていくのではないでしょうか。私も釜石の方々とお約束していることがひとつだけあります。それは何かというと、そんないろいろなことできるわけではないですけれども、宝来館もそうですが、ずっと見ていたい。これからどうなるかをずっと見ていたい。「見ているよ」ということだけは、お話はしてきたつもりです。何ができるかどうかはわかりません。けれども、「見ているからね」と。だから、あまり無理はしないつもりです。

震災後、私たちが、東大さんが釜石とご縁があるということをご存じの方に「何回ぐらい行ったの？」とよく聞かれました。だけど、別にそんなに大して行っていないよと答えました。ただ、私らが決めているのは、ずっと行く。これからどんなにいろいろな人の関心が変わっても、無理せずにずっと見続けていくということだけはお約束をしています。たぶん我々よりは、ナベちゃんとかミノリちゃんとか、ジュキヤくんたちは、ただ見ているだけではなくて、やって、たくさん釜石で失敗して、釜石の方々に迷惑をかけてください。そしてたくさん叱られてください。そのなかで、いろいろな意味で挫折をして、そのなかで見つかる本当の希望というものがあるはずです。これからいろいろなことをやっていると、だんだんやはり考え方の違いとか、ちょっと遠慮してきた部分も変わってくると思います。そこから皆さんの、また新しい希望が生まれてくるのではないでしょうか。

ぜひこれからもこの大学と釜石の関係、緩やかな絆として、いろいろな希望が広がっていくことをとても楽しみにしています。

今日はこれだけたくさんの方にお越しいただいて、勝手なことをお話しさせていただきました。貴重な機会をいただきまして、感謝申し上げます。以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

シンポジウム

はじめに

川田：皆さん、あらためまして、こんにちは。聖学院大学ボランティア活動支援センターの川田虎男と申します。主にセンターのアドバイザーと、ボランティア論などを担当させていただいております。また、釜石のツアーについては、学生さんと一緒にいつも喧々諤々しながら、どんなことができるかなということを考えながら、関わらせていただいております。今日は限られた時間ではありますが、私が進行をさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず最初に簡単に自己紹介をしていただくところから、中身に入っていきたいと思います。

岩崎：私は釜石から来ました宝来館女将の岩崎昭子と申します。聖学院大学の学生さんたちにいつもお泊まりいただいています。この間は学生さん、卒業生の方にインターンとして来ていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

渡邉：聖学院大学こども心理学科 3 年の渡邉エリカと申します。チーム釜石フェスティバルの実行委員兼聖学院大学復興支援ボランティアチーム SAVE の代表も務めております。釜石が大好きです。そして、藤原政子さんのつくる黄色いフワフワの卵焼きがとても大好きです。今日はよろしくお願いします。

川田：ありがとうございます。玄田先生にも引き続きお世話になります。よろしくお願いします。

後半のシンポジウムは、講演会のサブタイトルになっている「困難からの新たなスタート」ということに引きつけながら話を進めていければと思います。実はこのサブタイトルは私やセンター所長の阿部先生、コーディネーターと一緒に玄田先生の研究室を訪ねた時に、先生から「タイトルは希望のチカラでいこう。サブタイトルはみなさんで考えていただけますか」という宿題をいただきまして、私たち真剣に悩んだ結論として、「困難からの新たなスタート」という言葉を使わせていただきました。それは玄田先生のなかで希望という言葉が今日のお話でも試練や挫折とつながっているらしいというお話もございました。そして玄田先生の本を拝見させていただいて、挫折を経験し、何とかくぐり抜けてきた人ほど、希望を持っている傾向があるというお話や、過去の挫折の意味を自分の言葉で語れる人ほど、未来の希望を語ることができる。そういった言葉がありました。今日の先生のお話にもつながるのかなと思います。

この「挫折する」という言葉、私たちは「困難」という言葉に読み替えさせていただきましたが、この困難という言葉のなかに 2 つの思いを込めさせていただきました。ひとつは東日本大震災、大きな困難です。このことについて岩崎さんに語っていただきたいと思います。そしてもうひとつは現代の若者たちは、生きづらさを抱えている、ということ。特に聖学院の学生さん、渡邉さんのようにとても元気で輝いているところもあるし、同時にすごく優しい学生が多いのですが、その優しさのなかにどこか悩みや生きづらさ、そういったものもあるの

かなということを私たちは感じていました。そういった両者が出会うと、なぜか覚醒が起きて、みんな元気になる。それが私たちが釜石に行き続ける理由なのかなとも思っています。困難を持ちつつ、でもここを新たなスタートにしていきたい。希望に繋がる物語にしていきたい。そんな願いを持ちながら、この後半のシンポジウムを考えさせていただきました。

3.11 あの日からの歩み

川田：まずは宝来館の女将さんにお話をいただきたいと思います。女将さん、簡単に自己紹介をいただきましたが、私、先ほど渡邉さんが紹介をしていた藤原政子さんに昨日うちに泊まっていただいたのですが、その藤原さんが「女将さんはみんなを幸せにするチカラを持っている人だ」とおっしゃっていて、私たちは本当にそうだなと感じています。聖学院のなかでも女将さんの大ファンがたくさんいるのですが、でもそんな女将さんは、東日本大震災の時に津波にのまれて生還をした。そういった経験のなかで、さらに旅館も被災しながら、現在復興されて、リニューアルオープンということで、さらなる発展をされている。きっと苦難な道のりだったと思うのですが、そんな頑張る女将さんの姿に、ファンになってメロメロになっている学生たちがたくさんいます。そのまま勢いがついて、宝来館のインターン生になった卒業生もいるぐらいです。その女将さんの歩みを、3.11 のあの日から、すこしお話しいただけたらと思います。

岩崎：釜石の目の前、大槌湾にある根浜海岸という元は 2km ある砂浜で商売を、小さな宿をやっています。それがこうやってすみません。本当にありがたいお話をいただいて。これも震災にあったことで、出会いがありましたので、震災は悲しいことでもありましたけど、困難があったからこそという言葉に変えれば、こういう出会いをいっぱいくださったので、本当にこの出会いに感謝申し上げます。

玄田先生を今回の講演にお呼ばれになった、素晴らしいこのご縁でございまして、遠くから、釜石を一番よく、深く知って、心配して、寄り添ってくださっている。その方を今日、聖学院のこういう会に呼んだ。その人選が素晴らしいと思いまして、私が何かお話しするより、今の先生のお話で釜石のことを皆さんによく知っていただいたと思います。

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に地震がありました。あの日、私たちは最初に「今日は皆さん、山に逃げましょう」と、うちのスタッフと、その時いたお客様にお話しして、私は一度山に逃げました。でもその後に、うちの町内会の皆さんは、実は宝来館は避難ビルに指定されていたので、宝来館の駐車場に集まってきました。その皆さんを一回山から下りて迎えに行って、そして「早く山のほうに逃げましょう」というふ

うに誘導しました。それが偶然にうちのスタッフがスマートフォンで撮影していたものです。宝来館がずいぶん有名になったきっかけは震災にあって。その動画が世界中に流れたのです。そのスタッフは聖学院さんとそのあと繋がりを持つ、三陸ひとつなぎ自然学校というのを立ち上げた伊藤聡くんって今、後ろで手を振っていますけれども、彼は宝来館を卒業したあと、学生さんたちなどいろいろな人の繋がりを応援する一般社団法人を立ち上げるのですが、宝来館はそういうふうに震災にあって、映像を撮る人があって、そして 3.11 からそれまで考えられなかったような、出会いとかが始まった宿でございます。

宝来館は、2012 年 1 月 5 日に最初の再オープンをします。宝来館は従業員が 30 人ちょっといる小さな会社だったのですけれども、実はそのなかで亡くなった方が 3 名おります。動画に映っている仲間、その時宝来館にいたうちのスタッフは全員助かりますが、宝来館から、14 時 46 分に地震が起きて、そして最初の津波の傾向、15 時 11 分ぐらいからあるのですが、その間、どうしてもおうちが心配で、先ほど玄田先生がおっしゃったように、必ずやっぱり家族が心配になります。いろいろな事情があって宝来館から帰ったスタッフがおりまして、そして鵜住居地区に防災センターという所があります。そこに逃げて、うちのスタッフ 3 名が亡くなっています。防災センターは 300 人近くですか、はっきりした数字はわかりませんけれども、300 人近く逃げて生き残ったのが 34 人でした。先ほどの「釜石の奇跡」と呼ばれる学校、子どもたちは自分たちで逃げて助かっているよということで、東中学校、鵜住居小学校も宝来館のすぐそばにあったのですが、鵜住居防災センターという、「釜石の悲劇」という言葉も生まれたのは、実は同じく宝来館のある鵜住居でございます。

宝来館はスタッフ 3 人が亡くなりながら、そのあとの 4 月 17 日でしたか、ちょっと正確な日付を忘れていますけれども、その時に全員解雇します。そのあと雇用のお金、半分は出して雇用を続けてくださいという国の制度等もできたのですが、宝来館はもともと一人一人のお給料がたいへん安い給料しか払えない会社でしたので、半額補助だけでは従業員さん、生活できません。それで、4 月の段階で、「従業員みんなを助けるには、失業保険をもらうことが一番だと思う」という結果になりまして、全員解雇しました。

私は宝来館を父から受け継いでおりまして、どうにか会社をもっていきたいと思っておりましたが、でも働いているみんなを助けるには失業保険しかないという結果にあって、4 月 17 日、全員解雇をして、そして 2012 年 1 月 5 日でしたか、再オープンを果たすその間に、どうにか宝来館をもう一回再開したいということで動き始めました。その時に実は玄田先生にもずいぶん助けていただいていたのです。先生、先ほど唯一、つながりとおっしゃったのですけれども、先生が 4 月に釜石を訪ねてくださった時に、先生のお父様がお亡くなりになっていたという、本当に精神的にもいろいろなことがありながら、被災地の私たちを訪ねてくださったり、先生はお金とかではないとおっしゃいましたけれど、実は寄付金も集めてくださったり、私たち釜石市民を

助けてくださっていたのです。

生きるということの第一歩

岩崎：何をどうしたら私たちは前を向いて歩いていけるのだろうかと悩んでいる時に、いろいろな出会いがあったのです。そのひとつは外からこういうふうに釜石を支えてくださった皆さまとの出会いでもありました。また、宝来館は全半壊という被害だったのですが、宿を再開するという勇気をなぜ私が持ったかといいますと、最初、3 月 11 日から 3 月 26 日まで避難所をやらせていただいていたのですが、その避難所をもう解散しなさいという行政の指示があって、解散という時に、ある復旧工事にいらしていた電気会社の社長さんから、「避難所を解散したらば、水も出なくてもいい、電気もつかなくてもいい、壊れたままでいいから、俺たち泊めてください」と相談がありました。復旧工事に来ていた電気会社さんだったのですけれども、「女将。俺たちは、今復旧工事で社員たちを内陸や北海道、青森から連れてきているけれども、毎日車のなかで足を曲げて寝ている。俺は社員を殺すかもしれない」とその方はおっしゃったのです。私たち、生き延びるのに精いっぱいでしたけれど、そういう私たちを復旧させようと、電気工事の方も、土木関係者の方々も皆さん全国から集まっていただいておりました。そういう皆さんが毎日車のなかで寝泊まりしていたのです。「宝来館が避難所をやめるのであれば、俺たち、電気つかなくてもいいから、せめて社員に足を伸ばせて眠らせてあげたい」とその方がおっしゃったのです。その時に女将という名にカチッとスイッチが入りまして、「あら、こんな壊れた宝来館でも、この何もできない私でも、全てなくなった私でも、必要としてくれる人がいるんだ」と、そういうふうに言われたことが、私が旅館を始めようという最初のきっかけです。

私たち、人に必要とされるということが、あの当時、生きるということの第一歩だったのです。「あなたが必要だよ。あなたのこの建物が必要だよ」ということ。私たちまだ役にたつと。この建物もまだ生きていて、役に立ちたいと思っていると。そう思わせてもらったのが、その「足を伸ばせて泊まらせてほしい」と言われたその一言が、私たちまだ役に立つわと思って、旅館を再生しようと思ったきっかけでございました。

私たちのふるさとづくり

岩崎：いろいろな制度があって、いろいろな方との出会いがあって、そのなかでやはり私たち、自分がそこで一生懸命頑張っていたとしても、自分たちだけでは生きられないということを、またあらためてこの 5 年、もうすぐ 5 年たとうとする今、しみじみと思っております。町の復興計画は進んでまいりました。外から来る皆さんからは、どのような状態なのですかと聞かれるのですが、私たちにとっては進んでおります。日々見ておりますと、その進んでいるなかで、そこで自分たちが、そこで生業としてやろうとするいま、自分たちだけのチカラでは、産業も生業も成り立たないという現実がございます。外から来る皆さんが商店街で買い物をしてくださったり、そして震災直後は来られなかったけれど、今なら来られるよという皆さんがあって、はじめて私たちは、仕事としてやっていけるのです。

旅館が成り立つということは、野菜も買いますし、お魚も買います。従業員さんも30人以上いますので。外から来る皆さんが来ていただくことで、私たち被災地は今、立ち上がらなくてはいけないのです。自分たちだけで立ってきちんと成り立つというには、まだまだ時間がかかります。行政が決めた5年8年の復興計画通りにはいかないということを、私たちは今、自分たちなりにはわかっています。街づくりは30年50年かかるだろうなという覚悟で私自身はおります。元の街に戻るのではなくて、新しい街をとか、みんなが戻りたい街をつくらなくちゃいけないという気持ちになっておりました。その新しい街づくりは、そこに住んでいる私たちだけではできなくて、私たちのふるさとづくりは、こういうふうにご縁があった皆さま、緩い関係のある皆さま、ここに興味のある皆さま、その皆さんが私たちの街づくりのお仲間としてつくっていくしかないというのが、今本当に思っていることです。

聖学院の皆さん、学生さんが来ることで、私たちも成長させてもらっています。そして、私たちの所に来た皆さんは、必ず成長していきます。本当に私たちも感謝しています。ボランティアという繋がりから一歩進んで、それぞれが成長しあう空間づくりを一緒に、この繋がりが広がっていけばいいなと。育ち合う空間であればいいなというふうに思っています。

川田：女将さん、ありがとうございます。女将さんに最初に玄田先生と一緒に出ていただけたらとお話をしたら、「あ、玄ちゃんと一緒なら大丈夫よ」というご快諾をいただいて、お二人は緩やかなつながりではない、絆があること、すぐにわかりました。玄田先生にはあとでまたお話をいただきたいのですが、まずは渡邉さんにいきたいと思います。

今、女将さんのお話の最後に「お互いに成長させてもらっている」という言葉をいただきました。聖学院の学生は釜石で、もちろん「復興支援」という、支援という言葉のなかで釜石にお邪魔させていただいています。ただ、私たちが気付くのは、支援という言葉、女将さんは「ボランティア」という言葉でお話がありました。関わりはそこから始まっていくのですが、実は私たちのほうが多くのものをいただいている。多くのお土産をいただいている。そんな気持ちにさせてもらうことが多々あります。渡邉さんは私から見ていても、たぶん1年生の時はすごく物静かで、もしかしたらこのボランティアグループからひっそりと消えていなくなってしまうのではないかと思うぐらいに、「大丈夫かな？」というところから、突然ある時から覚醒をして、今、代表としてみんなを引っ張る立場として頑張っています。たぶん渡邉さんの秘めたパワーを引き出してくれたのも釜石なのではないかなと僕は思っています。釜石に行って、学生が何をいただいてきているのか。そん

なお話を渡邉さんから少しお聞きできたらと思います。

なぜ釜石なのか？

渡邉：先ほどお話にあったとおり、聖学院大学と釜石は深い繋がりにあります。聖学院大学の学生はなぜ釜石に行くのか、なぜ釜石なのかというところから入っていくと、やはり釜石の町が好きだから。釜石に住む人が、釜石の食べ物が、もう全てが好きだから釜石に行っているのだと、私はそう感じています。なぜそう感じるのかといいますと、ボランティアとして釜石に行くと、釜石の方がありのままの自分を受け入れてくださるのです。「ありがとう」という言葉から、笑顔から、もう全て優しく包み込んでくれるんですよ。聖学院大学というまとまりを包み込んでくれて、そのなかから個人をきちんと、名前も顔も全部覚えてくださって、一人ひとりに向き合ってくれるんです。そういう釜石の皆さんの姿勢に、私たちは突き動かされながら活動しています。

もうひとつですけれども、好きだからという気持ちとプラスアルファであるものですけれども、やはり自分ひとりで活動していても絶対長続きしないと思っています。では、なぜ自分はここまで釜石で継続的にボランティア活動ができているのかといいますと、やはりそれだけ私のことを思ってくれる仲間がいるということがとても大きいです。その仲間というのは、釜石フェスティバルのメンバーであったり、SAVE のかっこいい先輩の姿であったり、かわいい後輩たちであったり、同期であったり、私を見てくれるボランティア活動支援センターの職員さんであったり、こども心理学科の先生であったり、親だったり……。すみません。いつも釜石のことになると、感情があふれてしまって。いつも感情ばかり先走ってしまって、理性で話したいと思っているんですけれども、どうしてもそれがうまくいかなくて。そういう人たちがいるから、そういう仲間がいるから、私たち、私は釜石で活動ができるんだ。釜石が好きでいられるんだと思います。そういうつながりがあって、今回ヴェリタス祭で釜石フェスティバルというものを行うことになりました。目的は埼玉のこの地で釜石を紹介し、釜石をもっと知ってもらおうというコンセプトでフェスティバルを開いています。それが表の理由なんですけれども、自分のなかでもうひとつ理由があって、釜石に恩返しをしようという気持ちでこのフェスティバルに私は挑んでいます。というのも、釜石にボランティアで行っているのに、与えられてばかりいて、自分は行っているのに、逆に釜石の方にいつもエネルギーであったり優しさであったり、そういうものをもらい続けてきたので、そういう釜石に恩返しをしたい、「ありがとう」と感謝の言葉を釜石の人に、釜石の土地に、もう全てに伝えたいと思って、今回このフェスティバルを開きました。なので、手伝ってくれたみんなであったり、来てくれたお客さん、今、

ここにいる皆さまであったり、もう全ての、釜石に携わってくれた皆さまにありがとうと伝えたいです。本当にありがとうございました。

涙のあとに

川田：渡邉さん、ありがとうございます。

掛け合いでの話もしたいと思っていたのですが、時間が限られておりますので、ここからは玄田先生にお二人のお話を受けて、少しお話をいただけたらと思っています。

玄田：涙のあとに何しゃべろう。

川田：女将さんのお話を受けて、これからの困難と向き合っていくなかで、女将さんのお話のなかに、その希望の物語をどういうふうに私たちは見出だしていったらいいのかということを。

玄田：いや、もう、言っていた通りなので、もうあまりないんですけれども……。ナベちゃん、すごくよかったよ。自分の言葉でとつとつとしゃべれるって大したことなんだよ。それを自信に持つといいんじゃないかな。

さっき言っていたとおりなんだけれど、みんなに思っていることがあるんだ。たぶん釜石の人たちは、とてもあてにしていると思うよ。それは今もそうだし、これからもそうで、あてにするとかあてにされるってとてもいいなと思っているんだ。信頼ってちょっと強い言葉だけど、あてにするというのは、そんな無理強いはできないよね。お互いこれからいろいろな人生があるし。3年生って言った？　就職とかすると、仕事のことも忙しいだろうし、恋愛もあるだろうし、遊びもあるだろうし、いつもいつも釜石のことを考えてばかりいられないんだけれど、だけどたぶん、ずっとあてにしていると思うよ、みんなのこと。だからそれは覚えていてほしいんだ。だから、それを大事にするといいんじゃないかな。

それで、30歳ぐらいになった時に、人生のいろいろな決断があるという感じ。20代のうちはいろいろ経験して失敗して、学んできてほしい。それで、今自分の住んでいる街とか、最初に働いたところで頑張ってもいいけれど、そこで10年ぐらい経験したものを、もしかしたら釜石で生かすなんてことができるかもしれないよ。それもあるし、これからみんなが変わるのを楽しみにしている。

釜石の甲子川ってサケが戻ってくるけれど、私はサケになってほしいとは思わない。サケは死ぬために帰ってくるから。そうではなくて、いろいろなことを吸収してきて、そこでまた「おお。ずいぶんまた大人になったな」みたいになってほしいんだ。Uターンってあるじゃない？　あまりUターンっていうの好きじゃなくて、Iターンも。私はVターンがいいと思っているの。グッと行って、経験してまたグッと来てほしいんだよ。そういういろいろな思いがあるので、ここからは私が言ってもしょうがないので、

ちょっと話の出た伊藤くんに。伊藤くん、はい、どうぞ。

釜石と聖学院

川田：ご指名がありました。先ほど女将さんの話にもあった三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤さん。

玄田：聖学院の子たちが来た時にはどんな感じがしましたか？

伊藤：どうも伊藤です。よろしくお願いします。三陸ひとつなぎ自然学校の代表をしております。女将さんからご紹介いただいたとおり、震災の時は宝来館で働いていて、「早く早く」という動画を逃げながらたまたま撮っていた人間です。最初は宝来館を再建したいと思って活動していたのですけれど、被災地のなかに、瓦礫のなかに宝来館だけ直ってもしょうがないから、地域も復旧しなきゃいけないだろうと。それで、手法としてやり始めたのが、たまたまボランティアを受け入れるということでした。

そんなこんなやっていたら、2012 年 4 月に団体を立ち上げるということになって、そのタイミングで聖学院さんともお付き合いをいただくようになって、主に聖学院さんとのつながりは、学生さんが 30 人 40 人、バスでたくさんやってくる。そして、釜石に滞在している間のプログラムを組む。そういうお付き合いでやらせてもらっています。

釜石に来るとどんどん変わってくる

伊藤：最初は、正直それほど力強さはあまり感じていなかった。おとなしいとか、そういう感じです。やはり何度も釜石に来ることで、どんどん変わってくるんです。典型的なのは渡邉さんだと思っていて、正直、最初来た時はあまり印象がないんですけれども……、薄かったですね。そんな彼女でしたが、SAVE の代表になったらしいぞといった時に、本当かなと思ったんです。で、実際に来て、見てみたら、全然違うんです。さっきも感じたのですけれども、自分の言葉をちゃんと乗せるようになったのがすごいなと思って。だからこの 3 年間ですごい成長していますよね。みんな同じような感じで成長しているというのが印象です。

岩崎：先ほど政子さんのお話をしたけれど、一人ひとりのお母さん方に会ったりお手伝いすることによって、いっぱい勉強できたんだよね。感動もしたりしてね。ありがとう。

最初、聖学院さんが桜プロジェクトに来てくださった時に、すごく感動したのが、桜プロジェクトっていろいろな所であるのですけれども、そのなかで、聖学院の学生さんが「女将さん、これ、仮設のなかで育てて、仮設を出る時に自分のおうちのお庭に植えて育つ桜だから」とおっしゃったんです。本当に私たちのことを思ってくださる学生さん、いろいろいるんだけれど、あなたたち、ホンモノだよって言ったんです。

私も仮設におりましたので、仮設で自分の桜の花を咲かせて、私たち、仮設にいる者が、何が希望かというのは、仮設を出て、自分の家を建てること。自分のうちに戻ることというか。その庭を造る時に、仮設で愛でたこの桜を植えて、それが記念樹として育つんですよ。そんなことに思いを持っていってくれる聖学院の学生さんにとても感動しました。私たちの心に寄りそうって。押しつけではなくて。そして学生さんたちがその桜の樹を渡して歩いた、みんなに会うことで、その感動を実体験してくれるわけです。私たちの気持ちの素直さを。それで皆さん変わっていったと思うし、私たちも一緒に成長しましたよね。いろいろな人に出会ってよかったね。代表まで引き受けて、偉い。

玄田：これからはどうしたい？

渡邉：私、地元が茨城県なんですよ。茨城県日立市出身で。で、釜石でこういった活動をずっと通してやってきて、地元に帰って、地元の貢献がしたいという思いがすごく強くて。私、父がお花屋さんを営んでいて、釜石で地域の活性化というのを見ていて、私も地元で自分の花屋で、花屋を中心にして、地元の活性化をしていきたいという思いが強いんですよ。家業を継ぎながら、地元の活性化に自分も参加したいという思いがとても強いです。

玄田：それで日立と釜石の新しい関係とか、合コンするとかさ。

岩崎：人口を増やす。それ、大事です。

玄田：最近つくづく思うのは、この間、ラグビーとかやったじゃない？　いいチームってある意味簡単なことだなと思うようになって、サッカーでもなんでもそうだけれど、ほどほどに若手がいるんだよ。そして、ほどほどに中堅がいる。そして、ほどほどにベテランがいると強いんだよね。若手だけでガムシャラにやっているとうまくいかなかったりする。人口減少とかいろいろ言うけれど、ほどほどに備えられるといいと思う。釜石はだいぶ中堅が頑張っているからいいなと思っていて。あとはほどほどに若手がほしいよね。だからね、そんな感じでよろしく頼むよ。

「面白いね、釜石」と言ってもらえる街へ

川田：後半の司会はほぼ玄田先生にやっていただきました。どうもありがとうございます。では、最後に一言ずつお願いします。

岩崎：やりたいこと、これからのことよね。こういうふうに、ここに来た時に、今、立っている所が、「あ、私たち、誰も歩いていない道を今、自分たちがつくっている」という気になりました。自分たちが歩いたところの後ろに道ができるって、先生、今、自分たちは道を、新しい道をつくる先頭に立っているという気持ちにさせてもらっていて、それすごいよかった、私。いろいろな方と出会って、(玄田)先生と出会って。

玄田：たまには振り返って道を見たほうがいいからね。前見るのも大事だけどさ、たまにはチラッと後ろを見よう。
　伊藤くんはどう？

伊藤：これからですか。まもなく 5 年を迎えるにあたって、やれている感がすごく積み重なってきたなという思いはあるんです。うちは団体として「挑戦する人が多い町、釜石 」これの実現みたいなことを言っているんです。最近は高校生とも付き合いがあって、「釜石〇〇（まるまる）会議」で会った高校生覚えていますか。あの子が「仮設を家と呼ばない大人が多い」ということに気付いて……。大人にとったら仮の住まいですよね。それをどうやったら愛着を持って家と呼んでもらえるか。マグネットで彩ることで愛着を持って家と呼んでくれる大人が増えるのではないかということで、9 月にやったのですけれど、実はそれを 6,000 枚のマグネットを集めてやったんです。でもそれを作るのも彼女一人ではできないのですけれども、それを手伝ってくれたのがボランティアの人たちなんです。聖学院さんだけではなくて、いろいろな、各地にいる、一日に一回ぐらいは釜石を考えるぐらいの釜石ファンっていっぱいいると思っているんですけれども、そういう人たちが支えてくれることで、高校生のやりたい思いが実現していく。「漁師さんがこういうことをやりたい」というチャレンジを支えてくれるみたいな。釜石は人口が減っていくんだろうけれど、外からのコミュニティが支える釜石、そういうのを実現したいなと思っています。その間に自分が立つ。そういう釜石モデルみたいなものをつくって、釜石は人口が減るんだろうけれども、将来的に「面白いね、釜石」って言ってもらえる街をつくりたいなと思っております。

玄田：人口が減るということに、あまり恐怖感を仰ぎすぎるとよくないと思っている。というのは、震災前の釜石というのは、もちろん何もしなければどんどん人口が減っていくんだろうなというのがあった。女将の親戚の八幡さんもそうだけれど、ちょっとジタバタしてやろうみたいな感覚があって、ここもうちょっとジタバタするとそう簡単には減らないぞみたいな感覚。私は、ああいう感覚、すごい好きなんです。希望活動人口、と言っています。だから、人口が減るのは町の活気もあるけれど、自分の地域、日立でもそうだけれど、この地域も希望ありますよとか、そのためにこういうことをやっているんですよという人が、例えば今、何人ぐらいいるかな、釜石。100 人いるかな、500 人ぐらいいるかな。それが 500 人だったら全然雰囲気違うよ。だから、何かやっている時に「ちょっと今これやっているんだ」って伊藤くんみたいなのがパパッと出てくるのが、今、仮に 100 人だったらそれが 500 人だったら全然違う。いつもそういうことを思うんだ。だからぜひやってください。

川田：皆さん、本当にありがとうございました。聖学院の学生がなぜ釜石に行き続けるのか、平先生が最初におっしゃっていた濃い方々との出会いという、その一端も垣間見られたのではないかと思います。聖学

院大学も活性化に取り組むメンバーの一人としてまた加えていただけたら嬉しいなと思います。

限られた時間でしたが、皆さん、ご協力ありがとうございました。渡邉さん、岩崎さん、玄田先生、そして特別参加の伊藤さん、皆さん本当にどうもありがとうございました。